
明日の青春謳歌！

水無月五日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日の青春謳歌！

【Nコード】

N5087D

【作者名】

水無月五日

【あらすじ】

ある日、主人公は自分の未来を知ってしまう。預言書によれば、主人公は未来を知った一週間後に死ぬらしい。知らないで良い事を知ってしまった主人公はこれから一週間をどう過ごすのだろうか。

俺はあと一週間の命！？

冬独特の匂いが町中に充満し、防寒具を身に纏った人々が行き交う駅の前で俺は、白い息を吐きながら、口の大きく開いたゴミ箱に空になった缶コーヒ―を投げつける。

「ふざっけんじゃねえっての！ あのクソ北、バイトの無い平和な一日を台無しにしやがって！」

投げた空き缶はゴミ箱の淵に当たり、俺の足元に戻ってくる。

綺麗に空き缶がゴミ箱に入りさえすれば、少しぐらいは気分が晴れたものの、虚しい音を立てながら俺の元に返って来る空き缶を見ているとまた機嫌が悪くなる。

今日一日は結構いい日だった。テレビの占いでは三位という上々な結果。授業中返って来た小テストは予想以上の好成績。昼飯は食堂人気のメニューが食べられた。五時限目の休み時間は密かに恋心を抱いている相澤由紀あいざわゆきと話す事も出来たし。面倒臭いバイトも今日は休みだし。

でも、掃除の時間にその日のいい事を帳消しにするような出来事が起こった。

仲間らと箒を使って野球をしていたのだが、俺の打った三塁打は、見事に窓ガラスに直撃。新聞紙を丸めてガムテープで形を整えた簡易野球ボールに其処まで破壊力は無いって思っていたんだが、俺たちの予想以上の力を持っていたようだ。

勿論、その直後に掃除場所担当の教師、北に職員室まで連行され、俺一人放課後一時間以上絞られ、きっちり窓ガラス修理代五千六百円を攝取されてしまった。他に野球をしていた奴らと割り勘ならまだマシだろうが、何故か修理代は窓ガラスを割った俺一人に要求された。確かに俺はバイトをやっていて、給料日はつい先日だったわけだが、俺は窓ガラスの修理代を払うためにバイトをしているのではない。欲しいものや遊びに使うためにバイトをしているのだ。

自給七百円のバイトで五千六百円を作り出すには八時間もあの面倒臭いバイトをやらなければならぬ。実際にはもう俺の財布から修理代は出してしまってるわけだから、俺の先月の二日間がこんなにも馬鹿らしいことで無駄になってしまった訳だ。

ガラスを割った注意そのものは十数分で終わったのだが、その後の一時間近くは成績や授業態度のことで散々と嫌味を言われた。もう少して三年生になるのだから自覚を持って行動しろとか。そんなの誰一人、高校二年生や三年生の自覚を持って日々生活している奴なんて居やしねえつつうのに。

怒られ終わって教室に戻ってみれば、一緒に野球をしていた奴らはもう帰った後。代表して修理代をは払われされた俺としては、他の奴らに一言文句を言えれば、この事はチャラにしても良かったのだが、奴らは連行されていた俺を待っていたという事は無く、終業のチャイムと共に外に駆け出したんだろう。

沸々と怒りを胸に電車に乗り込んで自分の街まで戻ってくるまでに電車の中で四回も足を踏まれる。帰宅時間に電車の中が込み合い、足を踏まれるという事は慣れっこなのだが、今日だけは笑って許せそうに無かった。

心を落ち着けるため、自動販売機でカフェオレを購入したらブラックコーヒーが出てくる始末。

こういった時、必ず思ってしまうのが、もし、今後の人生が全て書かれている預言書があればどんなに楽かと言う事。

そんな便利なものがあつたら、俺は今日掃除時間に野球なんてしなかったし、カフェオレじゃなくて、ブレンドコーヒーを買っていた。まー今更そんな事思い浮かべたってしょうがないよな。怪我した時だってそんな事思っわけだし、これが『後悔』って事なんだろうな。

夏の時期とは日落ちの時間が違い、それに伴い急激に寒くなる日本の冬。こんな所で呑気に黄昏てる暇があつたら、さっさと家に帰って好きな音楽聴いて、嫌な事を綺麗サッパリ忘れてしまおう。そ

れがいい。

制服のポケットから携帯を取り出し、適当にインターネットの海を彷徨いながら曲がり角を曲がる。曲がった先の視界のすぐ隅に人影が映り、ヤバイと思った次の瞬間には衝撃を身体に残し、俺は無様に尻餅をついていた。

「痛た……」

中学生か高校生が良くわからない学校の制服を着た女の子が、俺と同じように尻餅をついていた。

「あ、スマン、大丈夫か？」

「曲がり角ぐらい、注意して歩いてくださいよ……」

女の子は尻というより太もを擦りながら唇を尖らせて俺に講義してくる。携帯を弄りながら歩いていたのは確かに俺の落ち度だが、ぶつかった女の子の注意力も散漫していたんじゃないだろうか。俺が女の子に気が付かなくても、女の子が俺に気が付いていればこの事態は避けられたはずだ。

道には女の子の私物と思われる手提げ鞆と、古めかしい感じのする本が一冊。

手提げ鞆はしっかりと口が閉じられている上に、蓋に付いている二本のベルトはしっかりと止められてあり、中身が散乱すると言う事はあるなそうだ。もしかしなくても、これは女の子もわき見して歩いていたんじゃないだろうか？

電車の中で漫画を読んでいる奴が、何の漫画を読んでいるのか気になるように、その子が読んでいた本の内容が気になった俺は、拾い上げてやるついでに、ちらりとその中身を盗み見る。

誰かの自伝であろうか、日付と、何時に何をしたと言う事が事細かく書いてあった。

×年、二月五日。駅前の書店で漫画の新刊を発見、購入。

人の趣味をとにかく言う気は無いが、こんなものを読んで何が楽しいか俺にはちっとも理解できない。

……読んでいて、俺はある不信な点に気が付いた。今は×年。こ

の本に書いている年と一緒にであるが、日付は二月四日。つまり、自伝でこの日付が出てくるのは少しおかしい。気になって他の項目も目を通してみると、明日放送予定の番組を見る事や、ニュースで新しく上映される聞いた事の無いタイトルの映画の情報などが書かれていた。

「ちよつと、それ返してください！」

読みふけていた俺から本を取り返そうと、女の子が一生懸命手を伸ばし俺に縋り付いてくる。

次のページをめくると、二月六日の事が書かれてある。本の左上には木野村清二と書かれてある。数十ページめくると人の名前が変わった。書かれている内容は全てその日に何をして、どんな結果になったか。

女の子の声を無視して俺は黙々とページを捲り、ついに自分の名前を見つけた。

「……ああ、すまない。返すよ」

「人のものを覗き見るなんてとてもいい趣味とは言えませんよ？」

「以後注意するッ！」

俺はそのまま回れ右。全力で本を持って走り出す。

これは多分預言書だ。いろんな人間のその先が書いてある！さつき読んだとき、木野村つて奴の何十年ものことが書いてあった！そして俺の名前も、今日あった事もぱつと見あっていた！これさえあれば、俺はこの先の人生、いい事だらけだ！

当然だが、女の子の体力と俺の体力には差があり、数分も走れば完全に女の子を撒く事が出来た。俺は本を片手にコンビニに入り、俺のこの先の人生が書かれてあるだろうページを頭から終わりまで全てコピーした。モノクロコピーで合計七十円。つまり七枚分。なんか少ないような気もするが、他の奴も大抵そんな感じだったような気もする。

コピーし終わった紙を鞆に突っ込んで、用済みになった本を抱えて俺は来た道に戻る。

三分ほど歩いた頃、人を探すように先ほどの女の子がきよるきよるしながら道を歩いている。この本を俺が持っけていても良いんだが、なんか気味の悪い本をずつと持っけているのも気が引けるので、女の子の頭をその本で叩く。

「おい、余所見しているとまた人にぶつかるぞ」

百五十センチいくか行かないかの身長の子の頭を叩いて本を目の前にちらつかせる。

「ど、泥棒ッ！」

女の子は親の敵を見るような目で俺を睨み、自分の頭上より数十センチ上の本を取り返そうと懸命にその場で飛び跳ねる。

「誰が泥棒じゃ。たまたま知り合いを見つけて借りてたもん返したんだよ。もし俺が泥棒ならこの本は返さねーぞ？」

「そ、それは困ります！ そんな事したら私が怒られちゃいます！」

日本人形を思わせるようなおかつぱの頭の女の子は涙目になりながらも、本を取り返そうと頑張る。ついつい虐めたくなるような女の子に本を手渡してやって足早にその場から去ろうとする。

「……名前。貴方の名前は？」

呼び止められた俺は心臓が胸から飛び出しそうになったが、冷静に振舞いつつ、髪を掻きあげる。

「如月。おんがひかりこと如月頼斗」

「そんな無意味に長い前髪を掻きあげてカッコつけてもあんまり意味が無いと思うですけど」

「なんだとう！？俺のこの前髪は意味が無いわけじゃない！世の中の汚いものを見ないようにしているフィルターなんだ！」

人のこのだわりに口を出すとは碌な女じゃないな、こいつ。

俺の名前を聞く事が目的だったのか、女の子はそのまま俺から背を向けて、小さかったその姿を更に小さくして、俺の視界から姿を消した。

色々と解らん事の多い女の子だったが、とりあえず此处で時間を潰している訳にはいかないな。早く家へと帰って、コピーした俺の

人生を眺めなければ。

家に帰り着く頃には日がすっかりと落ち、周囲を暗闇が支配していた。家に帰るなり、ブレザーを脱ぎ、階段の壁に取り付けられた制服掛けにぶら下げ、制服は待機状態に。ズボンはしわにならないように折り曲げ、使っていない椅子の背に掛ける。

Yシャツと、ジャージ姿という奇怪、奇妙としかいえない姿で鞆の中から折り曲げられた紙を取り出し、その内容を読む。

×年二月四日。

朝、占いの結果三位。まずまずの結果、占いの結果は当たらない。七時五十四分、携帯にメルマガが届く。マナーモードにし忘れていた事に気が付く。

九時二十九分、国語教師に朗読をさせられる。読み間違えることなく読める。

十時、移動教室。座っていた机に前の授業者の忘れ物と思わしき消しゴムを発見。そのまま放置。

昼、学生食堂で人気のメニュー、チキンカツ丼を注文する事に成功。

十四時三十七分、片思いの相手、相澤由紀と会話。会話が弾む。十五時四十二分、掃除場所の窓ガラスを割る。掃除担当教師北にそのまま一時間怒られ、修理代五千六百円払わされる。

十七時三十三分、街角で中学生ぐらいの女の子とぶつかる。不思議な本を見つける。

今日俺の行動と結果が丸ごと書かれているが、内容が事細かく書いてあり、気にも留めなかったことまで書いてある。しょうも無い事まで書かれてあるのが多すぎて、少々読みづらい。

だが、確かにこれは預言書のようなものだと言う事が理解できた。時間を忘れ、次々とこの先の出来事を読み進めていく俺の家の

窓を叩く音に俺は顔をあげる。

窓の外には驚くべき光景が広がっていた。

セーラー服姿で窓の外に今日ぶつかつた不思議な本を持つ女の子が居た。

「うおおおおっ!？」

驚いて俺は手に持っていた紙を枕の下に隠す。

「早く此処をあげてくださいーいッ!」

よく女の子を見ればカタカタと震えているように見えなくも無い。そんな度肝を抜く登場よりももう少し自分を大切にすべきだと思うのだが。

窓ガラスの鍵を開けてやると、窓から女の子は部屋の中に上がってくる。

「お邪魔しますぐらい言え、お邪魔野郎。というか此処二階だぞ、どうやって上つてきた？」

「うう、それは後々話すとして、如月頼斗。あなた、預言書をコンビニでコピーしましたね!」

「ぐお、なんでその事を! こいつエスパーか!? いや、俺の行動は預言書とやらに書いてあるんだな。」

「ああ、コピーしたさ! だが、そんな便利なものを持っているお前が悪い!」

「どんな責任転嫁ですかー!? 普通規約なら強制的に貴方からそのコピーしたものを奪うのですが、生憎貴方はあと一週間後に死ぬから、それまで見届けようと思います」

なんと話のわかるちびっ子だ。ちょっとまで、今何かとても不穏な事を言わなかったか?

「死ぬ? 俺が?」

「はい」

即答。そんなはずは無い、預言書には俺の数十年後先まで書いているはずだ!

枕の下から預言書のコピーを取り出して、最後の項目を見してみる

と……。

如月頼斗……×年二月十二日、駅前の交差点にて信号無視していた乗用車に轢かれ、即死。

あれ、俺死んじやってる？ 交差点で事故にあっちゃって死んじやってる？

「マジ？」

「…本気」

「うそだあああああああああああああ！！！」

一日目 不幸だけど幸せ？

「ちび助の言いたい事はよく解った」

俺が自分の人生の終焉が近いと解って一夜明けた。寝る前まで色々説明などを受けたのだが、くだらない説明が多かった。

昨日現れた中学生の女の子、チーナクル・メイリ・ビスケは人間とは違う生命体のようで、宙に浮いたり、姿を消したり出来るらしい。チーナクル……長いので省略し俺はちび助と愛嬌をたつぷり込めて呼んでやっているが、ちび助はその名前には不満があるようだ。

「ちび助ゆーなです！ 私の名前は……」

「長いから省略。全く、そんな長い名前だと二十数回指を動かさなくなる可愛そうな人がいや神が居るから、そいつのためにもちび助で納得しておけっつーの」

「だーからー、私とその神に近い存在なんですってー！」

自称『ネ申』であるらしいちび助の仕事は、預言書の予定から遅れ始めた運命を元の時間に戻す事だそう。例えば、急に懸賞に葉書を出さなければという衝動に駆られたりするのはいつらがそういう事をさせるように仕向けているとの事。基本こいつ等は人の運命とやらには干渉はあまりしないらしいが、著しく運命を変えてしまうような事をしそうになった時に初めて手を下すらしい。胡散臭えー。

「でだ、ちび助。なんでお前が俺と行動を一緒にする？ 別に俺が死ぬ十二日が近くなったら、姿を現せばいいものを。もしかしてお前らって相当暇してるのか？」

『暇って言うわけじゃありませんよ！ 他にも色々仕事がありましたね……』というか、誰かが監視をしていないと貴方はどんな行動を起こすか解らないじゃないじゃないですか！』

人通りの無い通学路を歩いているのだが、ちび助はステルスモードとかいう俺にしか姿が見えない様になってるらしいが、もしそ

うなっているのであれば、俺は独り言を白昼堂々行なう危ない奴ではないだろうか？　こんな俺の姿を幼稚園児が見れば指を指し、親が『見ちゃいけません！』と言うのだろうか。残り少ない人生に汚点を増やさせるなよ？

「大丈夫だつて、誰も逃げやしないって」

『そういう意味でも監視をする必要がありますが、残り一週間の命だ、やりたい放題やつちまえ！　といきなり刃物持ち出して街中で暴れられても困りますから……』

誰がんなことするかっつーの。

俺はポケットから預言書のコピーを出して、今日一日の出来事に目を通してみる。

二月五日。

八時二十三分、校舎の階段でこけかける。ちび助に笑われる。更に周囲から笑われる。

八時二十五分、廊下で注目を集める。

十二時十九分、相澤由紀とご飯を食べる。

十八時、いつものようにアルバイトにいそしむ。

二十二時十五分、バイト先でゆっくりし過ぎて雨に打たれながら帰る。

二十二時五十分、ニュースを見る。

とまあ、些細な事ばかりで、あまり人生最後の一週間の一日とは思えない。まあ、こんなもんだろうな。

「というか、ちび助。お前は学校に付いてくる気だろうか、俺は授業中とかはお前の相手をしている暇なんて無いぞ、もう少しで期末試験だから、此処でいい点を取っておかなければ留年の可能性すら出てくるからな」

「今更何を……」

ちび助の言いたい事は解るけれど、どうせ死ぬからって、全て手

を抜いてしまつたら俺の十七年の人生には、悔いばかりが残りそう
だ。有終の美と言う言葉があるが、まさにそれ。最後に自分は超頑
張つたつて思えたら、それだけで十分かもしれない。死ぬ事に何も
思わないわけじゃない。寧ろ死にたくないし、もつと生きたい。で
も、死ぬつて決まつてしまつたからには開き直つて一生懸命生きる
しかない。死ぬまで。

「遅刻しそうだ、ちよつと走るぞ、置いていつても文句を言つなよ
？」

そう言い残すと俺は学校までの距離を一気に走りぬける。

校門を通り抜けて時計台の時計で時刻を確認すると八時二十分ぐ
らい。遅刻しそうだと思つたが、走つたおかげが、全然余裕で学校
に到着する。

自分の下足ロッカーから学校指定のスリッパを取り出し、それに
履き替えてぺたぺたと階段を上る。

『そういえば、相澤由紀つて人だけかなり鮮明に書かれてあるけど、
もしかしてストーカーですか？』

「ぶほッ!？」

ちび助の余計な一言で俺は階段から足を滑らせ、思わずこけかけ
る。何とか踏みとどまつたが、俺以外の人間では階段の下まで転が
り落ちていただろう。

『思いつきり動揺してますねー』

ケラケラと笑いながらちび助は俺を指差して笑う。急いで周囲を
見渡すと、一年生の女の子だろうか、俺の無様な掛け声がそんなに
おかしかつたのか、顔を背けて肩を震わせている。

『あ、預言書に書いてあつたとおりですね、如月さん』

ふざけるな、これはお前が居なかつたら起こらなかつた事態だろ
うが、この野郎。

能天気な俺の横をスキップするちび助が妙に憎らしく思えてきて、
ちび助の尻を思いつき叩く。乾いた音が周囲に鳴り響く。

「きゃうんッ!？」

前を歩く生徒が一斉にこちらを振り向く。俺は何が何だかわからず、周囲をきよきよと見渡してみるが、前の集団が振り向くような事など一向に起こっていない。しばらくして、前の集団が頭を掻きながら、何か話しながらまた歩き出す。

「一体何があつたんだ？」

ちび助を見ると、周囲を見渡し、窓ガラスを見てため息をついた。『あ、危なかったです、思わずステルスモードが声だけ外れてしまいました……あ、これも預言書どおり！ 如月頼斗、注目を集める』なんだ、その安っぽいステルスシステムは、というツツコミよりも、またしてもこいつの所為で起こらなくては良いはずの事が起ってしまった。上機嫌で跳ねるちび助が妙にムカついたが、此处でまた何かすればいらん事件を起こしそうで自重しよう。

気を取り直し、俺は教室の扉を潜りクラスメイトと朝の挨拶をする。あと六回しか出来ないと思うと胸が締め付けられる。そんな俺のセンチな気持ちを汲んでくれたのか、クラスメイトが俺の首に腕を回し、いつもの様に騒ぐ。

「で、結局あの後ガラスどうなったん？」

「ああ？ 結局俺一人で修理代払ったし！ つかお前らも共犯だろーが！？」

「わりーわりー、今度ジューズ奢るわ」

そんないつもの会話が妙に俺を元氣付けてくれる。こいつらとつるんでいると、俺はもうすぐ死ぬって事すら忘れてしまいそうだ。

三時限目の授業が始まる。教科は社会科目。担当教師は黒板の前がテリトリーのように、うろろろ移動しない事でわりかし有名だ。この授業はありがたい。他の教科の宿題とかも出来るからな。

「……と、ここで……」

ヤバイ、眠い。そういえばこの社会教師の言霊には催眠音波が含まれているんだった。いかな、此处で眠ってしまったては……。そういえばちび助は何をしているんだろうか？

気になつて教室内を見渡すと、掲示物を一生懸命読んでいる姿が見える。何がそんなに面白いんだか。

俺は教師の目を盗んで、要らないプリントを丸めてちび助に投げつける。

「あた」

少し騒がしかった教室に妙な声が響き、クラスメイトが誰の声？などと話す。ちび助……お前のステルスモードは油断している時に何かあると、その効果を失うのか……。

クラスメイトにはれないように手招きして、ちび助を呼びつける。
『どうしたんですか、如月さん？』

ノートにペンで今自分が暇である旨を書き記す。

『テスト近くて真面目に勉強するって言う誓いは何処いったんですか？』

まあ、あれだ。授業中真面目に勉強するのは俺らしく無いからな、やつは最後の最後まで自分らしく生きてゆくべきだろう。

そういうこともあって、残りの授業時間は○×や五目並べなどをちび助に教えて遊び倒したのであった。

つーか、ちび助超弱え。

色々あったが、やっと今日のお勤めも折り返し。たまには一人で飯を食いたい気分だつてある。俺は購買部でパンなどを買つて、屋上で一人寂しく食べる事に。

こんな寒い時期に屋上で飯を食う奴なんて居るわけもなく、他人に気にする事無く飯が食べられる。四方をフェンスで囲まれたありきたりな屋上。学校は他の建物より高く、眺めがいいので、密かに気につてるスポットの一つだ。だが、こんなクソ寒い時期に屋上を選んだ理由がある。

『こんな所でご飯食べるって行儀悪いですよ？』

答えは至極簡単。こいつが居るから。そういえば訂正をしなければ。なんか変なのが傍に居るから一人じゃないな。

パンを食べようとすると、ちび助がチラチラとこっちを見ている。

視線の先にはパンがあり、俺がパンを動かすと、視線を動く。なんつーわかりやすい奴だ。

「お前も食うか？」

一つパンを放り投げると、表情を輝かせてパンをキャッチ。この様子ならフリスビーを投げると喜び勇んで走ってゆく犬と変んねー。ちび助はパンの包みを開けるとお預けをくらっていた犬のように、待ってましたと言わんばかりにかぶりつく。

ちまちまと減っていくパン。俺はこいつの姿が見えるから別にいいとして、こいつが見えない人はこの光景を見たら何て思うだろう？空間に消えてゆくパン。あきらかにトラウマものの映像だな。

「おい、ちび助、ばれないうちに食い終われよ……」

『ふぁーい』

ふと、屋上の入り口に目をやると、手に小さな弁当箱を持って、可愛らしい目を大きく開け、二度瞬きをする相澤由紀。

やべえ、見られた！？

「あ、相澤さん……どうしたのかな、こんな寒い時期に屋上なんて」

「き、如月君？ その……後ろ……パンが……」

恐る恐る指を指す相澤さん。やべえ、早く何とかしろ、ちび助！！

「どうしたの一体？」

何も知らないという芝居をしながら、ちび助の方を向くと、口いっぱいパンを詰め込んだ可愛そうな姿のちび助が居た。

「ぶっ！？」

笑うなという方が無茶な顔をしたちび助に吹いてしまう。

「何にも無いけど？」

「お、おかしいなあ、今パンが空に食べられてただけ……」

「そんなことあるわけ無いじゃないか、あっはっは……」

馬鹿ちび助！ お前は何のためにステルスモードになってるんだよ！ 早速今日だけで三回は存在ばれそうになりやがって！

いまだに疑問を浮かべる相澤さんを無理に目の錯覚だと納得させ、そのままご飯と一緒に食べる事に。何を話したのかなんて覚えてな

いほど俺は緊張し、残りのパンの味なんて全くわかんないものだった。

昼を過ぎてからの学校は早い。気が付けばもう放課後で、俺はバイト先へと急いで向かう。

俺のバイト先はホームセンターの裏方。商品をダンボールから出したりするだけのゆるい仕事。ゆるいといっても、結構身体には来る仕事なんだが。俺の持ち場には俺だけしかおらず、好奇心の塊のような目で俺の仕事をする姿を眺めていたちび助にも手伝ってもらった。

そのおかげか、早めに仕事が終わって、着替えて家に帰ることに。

「そつえば雨に打たれるって予言を外れちまってもいいのか？」

「んー、あまりいいとはいえないですけど、天候の予言はあまりあたらなぃんですよ。天気予報でも機械の計算で叩き出した降水確率でも外れたりするでしょう？」

まあ、確かにそうだな。まあ、俺自身濡れないで済むならそれに越したことはないし。

二十二時半ぐらいに家に帰りつく。予言では確かに雨が降るって事になっていたんだが、雨が降っていない。不審に思ってコピーを見てみると……。

二十一時五十分、仕事が早く終わる。

と書き直されていた。というか、コピーしたもので書き直されるときは、どんだけなんだよ、この預言書の力は。

着替え終わり、自室でテレビを見る。これで今日の預言書の内容は全て終わる。俺が死ぬまで後六日になるんだ。

『本日、○県×市の交差点で車が人を轢くという事件が発生……轢かれた……は病院に運ばれましたがまもなく……』

ニュースでは今日あった事件などを放送している。

「なあ、ちび助。こいつはさ、今日死ぬ運命だったのだろうか？」

『残念ですか、亡くなったとあればそうなんでしょう』

横で同じようにテレビを眺めていたちび助が答える。

「……こいつ、悔いなく生きていけたかな？ やりたい事とか全部やりきれたかな？」

『人は何時死ぬと言う事は解らないのでそれは……』

「俺は幸せなのかもな。本当に幸せなのは寿命で死ぬ事だろうけど、少なくとも俺は自分の死ぬ日がわかってる。それまでに色々と覚悟とか、遣り残した事出来るよな……」

『如月さん……』

一日目 不幸だけど幸せ？（後書き）

とりあえず二話目投稿！。

まだまだ色々と稚拙な点とありますが、ひたすら書いていくしかないですね。

お付き合いいただき、ありがとうございます！

次話にご期待を！

二日目 自分らしくいつも通り!?

二月六日

朝、俺が目を覚ますとちび助がその傍らで吐息を立てて眠っていた。

「ぶっ!？」

ショッキングな映像に俺はいきなり吹いたが、ちび助はそんな事にする様子も無くぐっすりと眠りこけている。

新しく買ってもらったおもちゃを寝るときも放さない子供のように、ちび助の手にはしっかりと預言書を握りしめている。

ふにふにとほっぺたを突いてみるが、効果なし。うん、完全に爆睡してるな。しょうがないからこのまま放置しておこう。

ちび助を放置し、リビングへと降りた俺は朝のニュースを眺める。また、今朝未明に交通事故で運転手が亡くなったらしい。こういったニュースを眺めると、俺はこの人は、悔いなく過ごす事が出来たのだろうか、ずっと考えるようになっていく。

「あら、頼斗！起きたの？」

エプロン姿の母親が俺の顔を覗き見る。この姿を見るのも、残り数回かと思うとやはり気分が優れない。

「ああ、起きたよ」

「珍しいこともあるものねー」

母親はそう笑うと朝食の準備を再開した。

ニュースでは依然事故の状況などを詳しく報道している。少し気分が悪くなってきて、チャンネルを変える

自分の死ぬ瞬間が近づいてきていることを知っている俺は、そのニュースが人事のように思えなかった。

亡くなったのは五十代半ばの男性。深夜、車に跳ねられたそうだし、この人が自分の未来を知っていたらどんな行動をしていただろうか？ 家族に別れの言葉の一つでも言っただろうか。

部屋着のジャージに突っ込んだ預言書のコピーを握りしめる。
よし、決めた。

「おふぁよーごふぁいます…如月さん」

早々に朝食を済ませ、部屋に戻るとまだ眠いと言いたげなちび助が目を擦りながら起き上がる。

色々とツツコミたい事はあったんだがそれを飲み込み、俺はちび助に拳を突き出す。

「な、なんですか？ その手は」

突き出された俺の手に戸惑うちび助。恐る恐るその下に両手を差し出してくる。

「返す」

ちび助の小さい手のひらに俺のこの先の事が書かれた預言書のコピーを手渡す。

突然渡されたコピー用紙を見て、ちび助は何度も俺と紙を見比べる。

何も言わず、俺は鞆を持って学校へと向かう。十分早い時間だが、いつもより違う行動して良いだろう。もう俺は預言書には縛られないのだから。

『如月さぁーん、待つてくださいー』

情けない声を出して、ちび助が例の安っぽいステルスシステムを使っただけを追ってくる。

「何だよ、通学中はあんまり話せないぞ？ 他の人に見られたらおかしい奴だって思われちゃう」

ちび助が俺に聞きたい事があるのは解っていた。そしてその内容までも。

『一体どうしたって言うんですか、如月さん？ 急に預言書のコピーを私に返すなんて。そんな事しても、死ぬって言うことは変わらないんですよ？』

それは解ってる。もう運命は変わらない。だからこそ……だ。

「今日も一人交通事故で亡くなったってよ」

『そ、そうなんですか……』

いまいち俺の言わんとする意味が理解できないちび助は本日何度目かの不思議そうな顔をする。

「やっぱさ、俺だけこの先何が起こるかってわかってるの、ずるいじゃん？ 他の人は突然なのにさ。そりゃあ、今更これを渡しても俺は後六日後に死ぬって事は判明している訳だから、フェアじゃないのは解ってるけど、同じぐらいのラインに立ってやるべきだと思うんだ」

『それは運の違いですよ……如月さんはたまたまこの預言書の写しを手に入れた。ただそれだけなんですから』

確かに俺は何億分の一以下の確立でちび助と会い、預言書を手にした。だが、果たしてそれが本当に良い方向に行っているかはわからなかった。

このまま、預言書のとおりに動いて死んでゆく。そんな人生の終わりはずまらない。最後の最後まで、いつもどおりに過ごしたほうが良いと俺は思った。

『そんな事しても結局、如月さんが考え抜いて行動しても預言書のとおりには動かないことになりますよ！？』

「ゲーム。ゲームだってそうさ！ 攻略本を読んでゲームを進めても、自力で考えて進めても結果は、エンディングは変わらない！でもよ、攻略本に頼らずクリアしたほうが達成感あるじゃんかよ。そりゃあ宝箱とかレアアイテム取り逃がすことはあるけどよ」

そう、結果は変わらないにしろ自分で動くことに意味がある。残り六日間、精一杯生きてやる！

二月七日日。

「はよーっす」

いつもどおりの何気ない挨拶。いつもどおりの友人らとのふれあい。そしてつまらない授業。

何一つ特別なことなんて無いけど、すべてが今の俺にとっては大切なものに見える。

「如月、今日バイトだっけ？」

「ああ、そうだなー」

いつも通りに一日は進んでいく。

授業中不意打ちで教師から問題を当てられたりしたが、それ以外は変わることなど全くない。

だが、その日はある大きな事を俺はやった。

「店長、急ですけど…俺バイト辞めます」

「ええ、困るよ！ 何かあったの？」

当然だが店長や他の人は驚く。

「ちよーつと留年しそうでやばいんで、そろそろ真面目に勉強しなければいけないって言われたんで……」

嘘をつくのは心苦しいが、やれる事はやれるときにやっておこう。もちろんそんなのは駄目だと、俺の辞職ははねっ返されると思っていたんだけど、案外すんなりと受け入れられた。

「学業第一だからね、学生は。でも、夏休みとか長い休みのときとかには手伝いに来てくれるとうれしいなあ」

「あ、はいッ！」

店長達の優しさに俺は泣きそうになった。

二月八日。

いつもと変わらない学校を終え家に帰り着く。

「明日は休みだし、思いっきり遊び倒すかな」

『ちよつと、何へ依然と遊んでいるんですか！ 如月さん、後五日ですよ、後四日！ もっと他にすることがあるんじゃないんですか！？ そんなやつても何の意味も無いテレビゲームなんかしようとしなさいで！』

そんなことを言われても、いざ何かをやるって思ったら、中々思い浮かばないも何だよな、これが。

無理に何かをするより、いつもやってることをやればいい。

『聞いているんですか、如月さん！？』

「ああ、聞いているとも。ところでちび助、お前も手伝え。隠しアイテムがなかなか取れない」

ゲームのコントローラーをちび助に渡す。

「このボタンがジャンプで、このボタンが其処のゲージが溜まってる時に押したら出る必殺技で…」

『いや、話を……』

上下に分割された画面で少し見辛くなったが、今は先の事より、このゲームを楽しもう。

「ほら、ちび助敵に攻撃されてるぞ。お前が死んでもゲームオーバーなんだから」

文句を言っていたちび助もゲームを始めて十五分もすれば、画面に合わせて痛いとか眩きながらゲームを楽しんでいた。

流石、日本のゲーム。世界でもトップクラスのクオリティを持つだけの事はあるな。

そうして夜は更けていった。

二月九日

いつもより三時間も早く起きてしまった。

土曜日曜は昼前まで寝ているのが基本なんだが、学校がある平日で考えてもギリギリ遅刻しない時間だ。

快晴の空。太陽がサンサンと輝ききつと外はいつもよりも暖かいだろう。

窓を開けて外の冷えた空気を部屋の中にわざわざ入れる必要もないのでそう思うだけにする。

ちび助は俺の監視をするために強制的に俺の家…押入れに転がり込んで来た。

一時期は俺の傍らで寝ると言う誘っているとは思えない行動を取ったちび助だが、俺の激しい抗議により押入れで寝ると言うこと

で落ち着いた。

俺の傍で寝ようとしていたのにも関わらず、寝顔をどうも見られたくないらしく、寝るときはいつも押入れの扉を内側から器用に閉めて寝ている。

全く訳の解らん。

「ちび助、起きてるか？」

押入れに向け喋り掛ける。

今この瞬間を何も知らない奴が見たらきつとドン引きするだろう。

『今起きました……』

問いかけて数分後押入れの中から声が聞こえる。

本当に今起きましたと言う声のトーンが普通より一つ低い声で返事が返ってきた。

「腹減ってるか？ 減ってるならパン持って来るけど？」

『おねがしますうー飲み物はオレンジジュースで』

なんという奴だ。使えるものはトコトン使う奴だな！？

まあ、こいつがステルスモードとやらでリビングに行き、パンを食べ飲み物を飲む姿をお袋が見たら、即刻寝込み、今夜の晩御飯はポッカポカ弁当になるだろうから、俺が部屋に食べ物を持ってくるという選択は間違いいではないな。

手すりに手を掛け、階段を降りリビングから適当なパンとジュースを持って部屋に戻る。

作業の途中、お袋が笑いながら部屋に籠城でもするのと聞いてきた。

確かに両手で抱えるパンと一リットルにもなる飲み物を抱えた姿はそうのように見られてもしょうがないよな。

二人でもしかやもしかとパンを平らげる。

「それにしても今日は天気がいいなあ」

窓から差し込む日光は眩しく、二度寝してしまいそうなほど天気が良い。

こんな晴れた日には…そうだ外へ飛び出そう！

「ちび助、俺は飯食い終わったら外に出るけど、お前はどうするよ？」

パンを食べ終え、オレンジジュースを飲んでいたちび助は、その手を止めて呆れたようにため息をつく。

「如月さあん、解ってるんですか？ あと三日ですよ、後三日！ 明々後日には如月さんは死んじやうんですよ！ 何を呑気に構えてるんですか。普通あと三日の命だったらこう、家族に向けて手紙を書いたり、今まで生きてきた人生を振り返ったりとかするでしょう！」

んな事言われたってなあ……イマイチ実感湧かないんだよな。

それに、俺は生きるとか死ぬとか今は考えないようにいつもどおりの毎日を過ごすって決めたんだ。

「手紙とか書けって言っけどよ、それで俺死んじまったらまるつきり自殺じゃねえかよ。俺は後三日で死ぬなんて知らない知らない」クローゼットの中に突っ込んでいたダウンジャケットを着て外に出る準備を始める。

そんな俺の姿を見て、ちび助はもう一度ため息をついて俺の後に付いてくる。

別に何処かに行こうという目的があつて外に出るわけじゃないので、気が向いた方向に足を向ける。

土曜日の住宅街。昼間学校に行っているから平日の車通りがどうなのかは知らないが、今日はやけに車が少なく思える。

バイト帰りに通る住宅街の車庫はがらんと空いており、何処の家族も買い物や遊びに行っている事が想像できる。

親父達と一緒に出かけたのはいつが最後だったっけなあ？
「如月さあん、一体何処に行くんですか？」

無言で俺の後ろをストーキングしていたちび助が目的地を聞いてくる。

そんなの俺に聞くな、知らん。

「んーそうだな、中央公園なんて良いかな」

目的地を聞かれてようやく目的地が決まった。

中央公園。俺が小学生の頃は色々とそこで遊んだものだ。最近はずいぶんその方面に向かう事も無かったので良い機会か。

公園へと無事にたどり着く。

着いたのはいいが、これから何をしよう？

たどり着いて理解。何もすることが無い。

遊具で遊ぶと言うのも一つの手だが、冷静に考えて痛い。

ため息一つついて、ベンチに腰掛ける。

公園の広場では近所にあるマンションに住んでいる小学生の子供達がブーメランを投げて遊んでいる。

「すげえなあ……」

子供達が投げるブーメランではなく、子供達の服装を見て声をあげる。

確かに比較的暖かい日ではあるが、やはり風などがモロに当たる指先や顔なんかは冷えて少し痛い。だが、公園でブーメランを投げて奇声をあげる子供達の殆どが半ズボン。酷い奴にいたっては上着を脱ぎ捨て、半そでで走り回っている。全くありえない。

『元気で良いですねー』

ステルスモードで俺の横に腰掛けるちび助は、そんな微笑ましい子供達を見て顔を緩める。

ちび助の表情に見とれるよりも、今ちび助が座っている場所に誰かが座ったらどうなるんだろうと全く関係の無いことが気になった。『如月さんもあやつて遊んだ事ありますか？』

「んーどうだろうな、あまり覚えてないが冬場に半ズボンで遊んではいたような気がするな」

小さい頃の頭は今考えるとかなりお馬鹿な作りだった様で、俺も目の前で犬のように駆け回る子供達となんら変わらない服装だった気がする。

彼らももう少し成長して、俺と同じようにこんな光景を眺めたらそう思うのかね？

『いえ、服装じゃなくって…あのゲームのあのキャラみたいなものを投げて遊んだのかって事ですよ』

「ああ、なるほど。よく遊んだよ何せ一時期、仲間内で大ブームだったからな、ブーメラン」

こんな会話でサラリとゲームのキャラのようなくと言つ例えが出て来るあたり、ちび助もいい具合に毒されてきたのか？

まあ、そんな事は置いておいて。

こういう遊び道具つて一昔前流行つたのがまた流行りだすというケースが多い。

俺たちの黄金時代で流行つたのが、S・ヨーヨーとか、ローラーブレードとか。

音楽番組で八十年代の曲などで画面に写される映像の中にこれらが結構写り込んでいたもんだ。

それが何年かの時を経てまた流行りだす。この繰り返しのような気がする。まあ、時代が変わることに少しずつ新機能がついているのだが。

俺が大人になった頃は一体どんな遊び道具が世に出回ってるんだろうな。

「ッ！」

そういえば俺は大人になんかなねーや。

「駄菓子屋で結構安く売ってたんだぜ、ブーメラン。二百円とか三百円あれば結構上等で弧を描いて手元に帰ってきたりするもんだ。」

それで、公園の外れにある木に引っかけちゃうんだよな」

『ああ、あの木ですか？ でもあんなのに引っかけちゃ取れないじゃないですか？』

ちび助は疑問符を頭の上に浮かべ、公園の外れにある一際立派な木を指差す。

「そ、あの木。引っかけちゃって皆でブーメラン取ろうと木の根元にたむろってさ、無い知恵絞ってどうにかして取ろうと頑張るんだ。結局それは近くで別の遊びしてた上級生の奴が難無く取ってく

れたりとかするんだ。それが羨ましくて木登りの練習したなあ」

何年も前の事だけど、そういうシーンだけははつきりと思い出せる。

必死に木にしがみ付いて何とかよじ登ろうとするんだけど、うまくいなくて困り果てるときに、ちよつと離れた場所でサッカーとかしてた背のでかいに「ちゃんらが難無く木に登ってブーメランとか、持ち主のわからないゴムボールなんかを一気に下に落としてくれた光景は小さかった俺の記憶にしっかりと刻み込まれている。

ちよつと昔に思いを馳せていると、ブーメランを投げ合っていた男の子の一人が力加減を誤り、木にブーメランを引っ掛けてしまう。
『あつ、如月さんブーメランが木に引っかかりましたよ？』

ちび助もその光景に気が付いたらしく、あわてて木の根元に走る子供達を眺めていた。

「よくある、よくある」

膝の上に手を置き、頬杖をついてその光景を眺める。

子供達はバツ力などで言いながらも、何とかしてブーメランを落とそうと頑張っている。

『取ってやらないでいいんですか？　ちよつと怪我しそうですよ！？』

ちび助はその子供達の姉のように勇敢に木へと登ろうとする子供を見守っている。

「親は何ていうかわかんないけど、こういう時に怪我したほうが大きくなれるんだぜ？」

『逆に成長が遅れそうですけど……』

「ちげえ、身体じゃなくって心がだ」

子供つてのは馬鹿だから口でいっても完全に理解できない。

いくら交差点が危ないって毎日小言を言っても、何で危ないのかつてのを完全に理解できないもんだ。そして一度、車に轢かれそうになった時、だから危ないのかって理解する。そして小さい頃に負う傷なんかは一生ものの思い出と教訓になる。

木を蹴ったり、物を投げたりしてありったけの知恵を絞っていた子供達だが、全く取れる気配の無いブーメランを諦めようとしていた。

「やれやれ、もう諦めるのかよ。最近のガキは根性ねえなあ……」

眺めているのをやめて、俺は子供達に近づく。

「さっきから何やってんの？」

全部を知っているのだが、ワザと大事な用件を話さない。

「ブーメランがね、木に引っかかったんだよ。みんなでとうとうしてるんだけどさ、ぜーんぜんとれないんだ！」

ブーメランの引っかかっている枝を見ると、ブーメランが綺麗枝の間にはさまっている。これではいくら枝を揺らしても、物をぶつけても取れる訳が無い。

「よいしょっと……」

何度も登った木。久々に登るのであるが、コツをそう簡単に忘れるわけがない。一つ怖い点があるとすれば、今の俺の体重で折れる足場が無いかどうかだ。

枝や木の幹に軽く足を乗せ、その場所の強度を確かめながら上に登る。

ブーメランの引っかかっている枝の周囲にはゴムボールやヘリコプターのプロペラみたいなプラスチックのおもちゃなんか引っかかっていた。

「よっと……」

枝を掴んで大きく揺らすと、風の強い日に熟れた果実が木から落ちるように、面白いぐらい遊具が下に落ちてゆく。

子供達の目的のブーメランが地面に落ちたのを確認して、適当な位置から下に飛び降りる。

着地時に少し足が痺れた。

「さんきゅー！」

「すっげー、どうやってのぼったの!？」

木から飛び降りた俺を子供達はまるでヒーローが登場したという

様な瞳で俺を見つめる。

「長年の経験かな」

そう答えると、俺は足元に落ちているブーメランを拾って二度持ち直す。

「なっつかしいなあ……」

脇の下までブーメランを持っていつて、そのまま勢いをつけて空にブーメランを投げる。

ブーメランから手を離す際に軽く手首のスナップを利かせて横回転ではなく、縦回転でブーメランを空に遊ばせる。

俺の投げたブーメランは戦闘機のアクロバティック飛行のような宙返りをし、少し離れた地面に落下する。

「すっげー！　いまたてにかいてんしたッ！」

子供達は大いにはしゃいで、落ちたブーメランを取りに行く。

「なげかたおしえて！」

ブーメランを拾ってきた子供は俺を取り囲む。

先ほどまで座っていたベンチに目をやると、ちび助が羨ましそうにこつちを見ているのがわかる。

「ああ、教えてやるからちよつと待つてな。上着置いてくる」

急いでベンチに走り、動くのに邪魔な上着をベンチの上に置く。

「ちび助、見えないところでそのステルスシステム外して一緒に遊ぼうぜ？」

『えっ…でもどうやって？』

困惑の表情を浮かべる。恐らく、どうやってステルスを外すかということより、どうやって輪に入るかがわかんないんだろう。

「簡単。俺に任せとけて」

ちび助にそう言う俺は子供達の元へと戻る。

半信半疑といった様子のちび助はステルスシステムを外すため、一度公園を出る。数秒後、また公園内に戻ってくる。

正直、ステルスが効いていても俺は見えるから、ぶっちゃけ今見えてるのか、見えてないのか解らない。

「よし、よく見てろよ……」

ちび助の方に軽く縦回転でブーメランを投げる。

予想通りちび助のすぐ近くにブーメランが落っこちる。それを確認して、俺は手を振りながら声をあげる。

「おい、ちび助！。ブーメラン取ってくれー！」

俺の声が聞こえたちび助は戸惑いながらブーメランを投げる。

ブーメランなど投げた事の無いであろうちび助の投げたブーメランは、ブーメラン初心者らしくへろへろで明後日の方向に飛んでいった。

投げて渡すことを諦めたちび助はいそいそとブーメランを渡しに来た。

皆が見ているまで恥をかいたちび助は少し赤い。

「下っ手ピだなあ……ちび助は」

「しょうがないじゃないですか、投げた事無いんですから」

言い訳じみた言い訳をするちび助。

「えー、ねーちゃんブーメランなげたことないの！？ ホントにー？」

子供達が次々にちび助に質問を始める。

何て答えたらいいか解らないちび助は焦り始める。

「じゃあ、皆でねーちゃんにブーメランの投げ方教えてやるっか？」

そう宣言すると俺はちび助の肩を叩く。

こうして、俺が子供に投げ方を教え、ちび助は子供達から投げ方を教えられ、日が暮れるまでその子供達と遊んでいたのだった。

二日目 自分らしくいつも通り!?(後書き)

なんか時間空いてしまいました……。

一日単位で書いていこうと思っていたんですが、あまりにも書くことがなさ過ぎてだいぶ書き方を変えちゃいました。

まだまだ、だなあ……。

三日目 雨の日の約束。

二月十日

朝方、雨粒の落ちる音で目が覚めた。時計を見ても、まだ五時過ぎだった記憶がある。流石にその時間から起きようと思うほど俺は年を重ねていない。そんな時間に起きれるのは人生の酸いも甘いも体験してきた人達だろう。

寝返りを打ち、また俺は揺れる意識を闇に手放した。

次に目が覚めたのは九時八分。相変わらず外では雨粒が地面で弾ける音がしていて、風で揺れる葉の音や、屋根から滴り落ちる雨粒が重なり、音楽のように聞こえなくも無い。

「ちび助、起きたか？」

押入れの中のちび助に声を掛けるとワンテンポ遅れて返事が返ってくる。俺のこの問いかけがちび助にとっては目覚まし時計なのだろう。

まあ、ちび助が此処に居るのも、魔法の国から修行に來たわけじゃない。俺の行動を十二日まで監視する事。それがちび助の居る理由で、監視対象が起きる数時間も前に起きる必要は無い。

もつと俺がヤンチャな性格をしていたら、その必要性が出てくるかもしれないが、ちび助が寝ている事をいいことに外に抜け出そうとかいう考えはさらさら無い。

ちび助を起こしたので、俺はキッチンからまた適当なパンを抱えて自室に戻る。

家の中に居ても多少ジメジメした感じがする。この分なら外の状態はもつと悪く、雨風がいつもより強いであろう。

『それにしても雨強いですねー』

ちび助パンを齧りながら外を眺め呟く。俺もそれに釣られるように窓のカーテンを開ける。

窓に打ち付ける雨であり外の状況は確認できないが、雨音や水

溜りの水面が波打っているところを見るとかなり雨風が酷いようだ。今日は日曜日。土曜日の翌日だから当然である。

日曜日はかなり心躍る日で、理由を説明しろと言われても答えに困るが、兎に角心が躍るのである。

だが、今日は違う。

激しく降り注ぐ雨。自転車クラスの軽いものであれば簡単に倒してしまいそうな強い風。明日、人と今日の事で話すとするなら『雨の日』ではなく、『大雨の日』というだろう。そのようなレベルである。

生憎の天気だ。さあ、今日は一日引きこもっておくか。

雨の日に外に出かける気など余程の事がなければ起きるはずもない。

『そういえば如月さん。この枕に使っている本って相当高そうな本なんですけど、いいんですか？』

何？ そういえばちび助に枕を渡した覚えはない。ずっと腕を枕にして眠っているものと思ったが、本を枕にしていただど！？

それに高い本というのがイマイチ頭に浮かばない。

「何の本だよ？ 高い本なんて……」

「これです」

ちび助が取り出した本は、厚さは辞書並、大きさは週刊誌並の本である。タイトルは『動物百科事典』こんなタイトルの本を買った覚えはないし、到底俺が買うとも思えない。

あれ、なんか引つかかる感じがするぞ。なんというか、思い出せそうで思い出せない……。

『それにしても如月さんも小さい頃はこんな図鑑を眺めていたんですねー。なんか微笑ましくって良いですよ』

いや、マジで買った覚えがない。というかそれは……。

「お、思い出したッ！」

記憶の中で風化していたものが甦る。

「その辞典は中一の自由研究で市の図書館から借りた物なんだよ。

すっかり忘れていたぞ」

そう、それは中学校一年生るとき、夏休みの宿題で自由研究が出た時に、図鑑に書かれていることを写せば楽かと借りた物だった。

この家から図書館まで自転車で三十分以上掛かる距離で、行くのが面倒である。それに図鑑ともなれば本の重さも桁違い。そのような事もあって、ずっと本を借りたままになっていた。

『中一から今までって…… おおよそ三年間以上借りてるじゃないですか！？ 何してるんですか、この図鑑が借りられなくて困っている子供も沢山居るはずですよ、思い立ったが吉日。今日返しに行きましょう！』

ちび助は図鑑を鞆に詰め、それを俺に手渡す。

「いや、そのままでもいいんじゃないかなあ……」

返しに行く気にならない。それには色々と理由がある。

一つは外が雨だということ。そしてもう一つが、その図鑑を借りていた期間である。

一週間とかじゃ、返すのを忘れていたという理由になりそうだが、三年以上借りていたというのは、どんな理由になる？

思い出してみれば、返却期間を過ぎた一ヶ月ぐらいは図書館から本の返却を催促する手紙が来た気もするが、しばらく放置し続けたら来なくなった。そんな忘れられた本を今更返しに行くのはちよつとな。

それに何食わぬ顔で返却したとしても、コンピューター管理されている図書館の本なら、貸し出した日なんかが一発で出てくると思う。

流石に何年も前の年が出てきたら気まずいよな。

『駄目です、昨日は如月さんに付き合ってたんですから、今日は私に付き合ってもらいますよ』

もうどうにでもなれ。

「やっと着いたなあ……」

ちび助に無理矢理この大雨の中重い本を持って外に連れ出され、強い雨風の中、一時間かけてやっと図書館に着いた。

図書館に着く頃には靴や衣服はほんのりと湿り気を帯びていた。水溜りなんかを避けて慎重に歩いてきたのだが、やはり濡れるんだね。

「こんなに雨風が強いとは思いませんでしたよ…」

ちび助も家を出てからステルスモードを解いて一緒に歩いてきた靴が濡れるのが嫌だったのか、ちび助は微妙に宙に浮いていたが。身長の高い俺と身長の低いちび助が並んで歩いたらいつもならかなりの身長差がわかるのだが、今回はそれが小さかった。

流石に晴れの日になんかそんな事をすればたちまちちび助は『浮いてる子』になってしまうが、この大雨のおかげで、足元をあまり凝視する人は居なかったようだ。

「ささ、受付のおねーさんに早く返してきなさいです」

ちび助は俺の背中を押す。

貸し出し、返却カウンターに陣取っている職員の人はいかにも説教好きそうなおばさんだった。こんな奴に返したらどうなるか想像できるぞ。

「もう少ししたら返すよ。ほら、人並んでるし、なにせ借りていた期間が期間だから、検索に時間掛かるかも知れないしさ」

ちび助はその理由を聞いて納得したのか、ちび助の注目は本に向けられていた。

良かった、こいつがあんまり返却システムを理解していなくて。検索に五分も十分も掛かるなら、とつくにこの返却カウンターは人であふれているぞ。

「何か興味あるんだったら読んでみれば？」

俺の提案にちび助は驚きの表情を隠せない。

「借りるのは登録がいるけど、此处で読むのは自由だぜ？」

余程読みたい本があったのか、ちび助の表情が輝く。

「迷子にならないように、読みたい本が見つかったらあのテーブル

で読んでろよ」

窓際の小さな机を指して言う。椅子の多きさからして、三人掛けの机のようで、あまり人も居ないこの状況なら特に迷惑にならないだろう。

ちび助は『はい』と返事をして、本を探しに駆け出す。そして職員の方に注意を受ける。周りの人がやり取りを見ていたのか、笑いを堪える。あれは他人、あれは他人。

何度か謝るちび助を見て、恥ずかしくなってきたその場を離れる。定期的に本が入荷される図書館ではあるが、小学生から老人まで利用するこの図書館。入荷される本もその事も配慮して、あまり高校生向けの本が入荷されることは少ない。

あるとするなら、テレビなどで話題になった本とか。流石に最近人気の漫画などは取り扱っておらず、読む本が見当たらない。

とりあえず本を探す前に、図鑑をどうにかしなくては。

ラベルに示してある数字とアルファベットからこの図鑑の本来あるべき場所を探し出す。

その後は簡単だ。後はその図鑑を棚の奥深くに押し詰めて、他の図鑑で隠す。これで一年に何回かある本の整理の日に発見されるだろう。

流石にコンピューターで記録されているから、見落としていたとは思われないが、かと言ってレンタルCDショップのように延滞料金など取られるはずもないだろう。

これで任務終了つと。

それから二十分ほど本を探したのだが、これといって読みたい本はなく、映画雑誌など数冊持って机へと向かう。

俺よりも早く本を見つけたちび助は一人テーブルで薄笑いを浮かべ、本を眺めている。

ちよつと不気味な光景に笑いが出そうになったが、それを堪え、ちび助の元へ。

「何読んでるんだ？」

ちらりとちび助の本を覗き見ると、美味そうなケーキなどが載っていた。その下には手抜き絵でボールをかき混ぜる絵や、カップで何かを入れている絵が載っており、レシピ本だということはすぐに理解できた。

やっぱりちび助も女の子だなと思いつつ、映画雑誌を眺め始める。真面目に記事など読む気になれず、写真を眺めるだけとなってしまった。相変わらずちび助は薄笑いを浮かべ、レシピ本を眺めている。

ページを捲る速さから、特に調理法を読んでもわけもなく、俺と同じで写真を眺めているだけだということはすぐにわかった。

「如月君？」

肩を突然叩かれ、振り返ると相澤由紀が其処に居た。

小さな手提げ鞆を持っているところを見ると、どうやらお出かけのようだ。でも、この雨の中何処へ？

「もう、この雨の中映画を見に行こうって愛と約束していたんだけど、愛したら雨だから今日はパスって急にドタキャンするんだよ、雨が強くなってきたから、雨宿りに図書館に入ったら、如月君が居たからね」

相澤さんの肩が濡れているところを見ると、結構外で待っていたようだ。外に目をやると、数メートル先が見えないような強い雨であつた。

「まあ、らしいといえばらしいよね。もう少し雨が弱かったら良いんだけどさ」

映画雑誌を閉じて相澤さんとの会話に集中する。

「如月君は何？ デート？」

相澤さんはちび助を見て俺をからかうような口調で言う。

「こんな味気ないデート嫌だよ。とゆーかちび助は…まあ…近所の知り合い」

学校での知り合いにちび助を見られ、答えに困る。ちょっとありきたりな答えであるが、これで大丈夫だろう。

「面倒見がいいんだね」

相澤さんはそう笑うとちび助の本を覗き見る。

「お菓子作りが趣味なんだ」

ちび助に話しかける相澤さん。心の中でちび助がボ口を出さないように祈る。

「いや、作るのは趣味じゃないです。どちらかというと食べるほう」
ちび助の答えに相澤さんは声を殺して笑い始める。ちび助らしい答えに俺も思わず噴出しそうになる。

そして相澤さんは名案が浮かんだとばかりにちび助に声を掛ける。
「今度一緒にケーキバイキング行かない？ 駅前にすぐく美味しい店があるんだよ、どうかな？」

提案を聞いて、ちび助の表情が輝き、ちらりと俺を見てくる。

その目は明らかに『いいですよ、行ってもいいですよ、如月さんのお金で』と語っていた。

「まあ、良いんじゃない、確かにそういうところは一人で行き辛そうだし、ちび助のお母さんには俺から言っておくから」

「何言ってるの、如月君も一緒に決まってるじゃない。同じ女の子だけでケーキバイキングに行くとなれば、やっぱりお互いの間で体重のことが頭によぎって、食べれなくなるじゃない。如月君が居ればそういうの気にしなくてもよさそうだし」

男ではあまり気にしない事ではあるが、女の子同士の食べ放題の席では、目線で会話が行われているのである。

これ食べたいけどカロリーが……いいじゃん、食べちゃえば……
そっちこそまだお皿残ってるよ……今小休憩中だから。

うわ、怖い！ きっとその場に居れば殺気に当てられているな。

「んじゃー来週の日曜日でどう？」

「そうですねー来週の日曜でいいですよ、如月さん」

「ああ、構わない。来週は晴れるといいな」

三人で窓の外を眺めると、強かった雨足が弱くなり、この分なら傘も差さなくても移動できる程度まで雨が弱まっていた。

「あ、雨上がってきたね。うん、じゃあこの辺で。デート楽しんでね、如月君。明日また学校でね！」

そう告げると相澤さんは図書館を後にした。

残された俺たちも家に帰る事にして、図書館を出た。

「如月さん日曜日、楽しみですね」

「そうだな、ケーキバイキングなんて行った事ないから余計にな」
ちび助は何かを思い出した表情を浮かべる。

…あ、来週の日曜日……。

もう俺は死んでるんじゃないか。

三目 雨の日の約束。（後書き）

もうじきラストです。

色々と失敗の多いこの作品。

この失敗を次にいかせればいいと思います。
後もう少し、お付き合いお願いいたします。

四日目 最後の前日。

二月十一日。

月曜日の朝。土曜日曜の二連休は気が付いてみれば終わっているというおなじみのパターンである。

「学校行きたくないな……」

「駄目ですよ、如月さん。学生は勉強するから学生なんですから」理由はわからないが、気持ちは解る事を言うちび助。

まあ、金を払って学校行ってるわけだから、サボるのは勿体無いらな。

「それに、今日が……」

言葉を言いよどむちび助。

「ああ、解ってる。ってか、お前はいつ俺が死ぬって解ってるわけだから……その言い方だと明日、朝通学中に……」か

ずっと開き直っていた訳だが、明日死ぬって決まってる俺としては怖くなってきた。

実際、その現実を受け入れていなかったんだ。答えを先延ばしにしていただけなんだよな。

「如月さん……」

泣きそうな顔になるちび助。そんな顔すんなって。

俺より背の小さいちび助の頭に手を置いて制服の上着を着る。

「さ、そろそろ家を出なきゃ遅刻しちゃうぞ」

そう言い残し、家を出るとお馴染みとなったステルスモードで俺に付いて来るちび助。

空は晴天といかず、所々に厚い雲を浮かべている。この分だと、明日は雨かな。

明日の天気が気になったので携帯で明日の天気を調べてみると、降水確率五十パーセント。確立は半分。何を基準とした五十パーセントかわからないが、明日はきつと雨だろう。

降水確率三十パーセントを超えたら大体雨だと考えておいたほうがいいだろう。今までで経験してきた事から学んだ。

教師が黒板に少し読みにくい字で板書し、眠気を誘う声でお経を唱えていても、全く頭に入らず、かと言っていつものように睡眠を誘われる事もなかった。

考えるのは明日の事。明日、どうなるのか。不安ばかりが頭をよぎる。今の状態は高校入試の結果を待っているような感じである。そんな事を考え、気が付けば終了のチャイムを聞いて、教科書を入れ替える。

上の空とはこの事を言うのか、本日何回目かになるチャイムを聞いていると、周囲が慌しく動き始める。

何事かと時計を見れば時計の針は十二時二分を指していた。

さて、腹は減ってないが、昼飯でも買いに行くか。俺は良くても、ちび助は腹減ってるだろうし。

いつもなら遅刻しそうな時のように全力で売店まで走るのだが、今日はゆっくりと売店に向かう。

「おばちゃん、パンを…あれとそれとこれ…あと…」

何だかんだで飲み物あわせ、千円分も買ってしまった。

おばちゃんは大きなビニール袋に入れたパンを俺に手渡す。別に変な顔はしていない。

一人でそんなに食べれば不思議な表情の一つでも見せるのだろうが、きつとおばちゃんは俺一人でこれを食べるとは思っていない。クラスメイトの分も入ってると思うているだろう。

流石にクラスで空中にパンが消え行く様をクラスメイトに見せるわけもいかず、この前と同じように屋上で食べる事にした。

『ふー、流石にずっと黙りっぱなしってのは落ち着きませんねー』

移動中や授業中、ちび助は何処で何をしているのか時々不安になるほど静かで、教室の後ろの空いた机の上に座っている姿を横目で何度か見た。

「別に無理して黙っている事もないのに。暇だったら俺に話しかけてもいいんだぞ？ もとより勉強する気なんてサラサラないんだからな」

『それは現役学生の言葉とは思えない台詞ですね』
自分でもそう思うよ。

空は明日雨が降るかもしれないと思えないほど晴れてきている。

「さ、時間もないし、早くパン食っちまおうぜ」

ちび助にいくつかパンを手渡して、俺もパンを齧る。

比較的好きな味のパンを買ったのだが、味がしないように思えた。

『あふえ、きふあらぎふあん、もうたふえないんでふか？』

とりあえずちび助、飲み込んで物を言え。

今の台詞を訳すると『あれ、如月さん、もう食べないんですか？』
だな。

「まあ、食欲もないしな。余ってるの全部食べていいぞ……ん？」

足音がこちらに近づいてくる。誰か来た！

「ちび助、パンを……」

リスやハムスターを彷彿させる口の動きでパンを口の中に詰め込むちび助。膨れた頬が余計にそれを彷彿させる。

そしてパンを抱え、屋上入り口近くまで移動する。

一人で屋上の真ん中で昼食を取っている姿はあまり人には見せない。
くない。

此処で手にスティックの一つでも持っていれば、一人で屋上で昼食を取る理由も解るだろうが、屋上に登ってきた人が教師なら目も当てられない。

ガチャリとドアノブが回る。

冷静を装いながら、屋上の扉から顔を除かせる人物を確認して、ちび助の尻を叩く。

「あきやう！」

予期せぬ物理的衝撃でちび助のステルスモードが解ける。

「あ、如月君…と、昨日の……ちび助ちゃん」

屋上に姿を現したのは相澤由紀だった。

彼女が此処に来る理由が見当たらないが、俺は今此处で昼食を食う正当性を作っておいた。

ちび助は意味もなく尻を叩かれた事か、ステルスモードを俺が解いた事で恨みのこもった視線で俺を見つめる。

「あれ、ちび助ちゃんはこの学校だったの？ 他のクラスに居たかなあ？」

頭を悩ませる相澤さん。居る筈もない。ちび助は此処の生徒じゃないから。というか、学生ですらない。

「いや、ちび助は…… あー中学生で、今日たまたま学校が早く終わって、あーその……そうそう、日曜の事が気になって聞きに來たんだ！」 自分でも驚くような言い訳をスラスラと言えるもんだと感心しつつ、相澤さんに説明をする。ちび助も俺に合わせるように相槌を打つ。

相澤さんはそんなちび助が面白かったのか、軽く笑うと『楽しみだね』と傍に腰掛けた。

「そんな訳で俺は屋上で飯を食べてた訳だけど、相澤さんは何で此処へ？」

そう、相澤さんがわざわざクラスメイトと昼休み談笑をせず、此処に來る理由がわからない。

本日二度目であるが、理由が解らないのは解らないのでしょうかがない。

「あ、やー……そう、日曜の事で如月君を探してたの！」

そんな筈はないな。それなら答えに詰まる訳がない。別の理由があったのは一目瞭然だ。

ちび助はそんな意図を汲み取れる筈もなく、表情を輝かせる。

「ちび助ちゃんも居たから丁度良かったなーって、如月君。そんな顔しないでよ」

俺の疑いを込めた視線に気が付いた相澤さんは焦って俺の肩を叩く。

「もう解ったよ、言うよ、言う」

俺の視線に負けた相澤さんは恥ずかしそうにコメカミを人差し指で掻きながら口を開く。

「今日如月君元気ないって言うか、ずっと上の空だったから、もしかして昨日の迷惑だったかなーって思ってた……」

やはり他人から見ても俺はそんなに上の空だったか。

まあ、授業中何があったか全く覚えてないから、それもそうか。

「別に迷惑じゃないよ。楽しみだしさ」

そう、本来はかなり嬉しい誘いなのだ。いい子だなんて思ってる相澤さんとおまけ付きではあるが、一日一緒に居られる事はかなりラッキーな事である。今にでも踊りだしてしまいたいほど、その日の事を考えると胸が躍るだろう。

だが、その約束は守れない。

安易に約束をして良かったものと今になって思う。今此処で断つても、どちらにせよ彼女を傷つける結果にしかない。

「じゃあ、集合時間はねー」

ちび助とノリノリで日曜の話を進める相澤さん。

「約束、守れないかもしれない……」

不意に俺の口からそんな言葉が飛び出す。それを聞いて相澤さんは目を丸くする。

「あはは、そうならちび助ちゃんに引きずってでも来てもらわなきゃね」

「お任せください、例えば地の中水の中、地獄からでも連れて来ますよー！」

二人で笑う。

ちび助はスイーツの魔力で俺が明日死ぬって事を忘れてる……。

昼休み終了のチャイムが鳴り、俺と相澤さんは揃って屋上を後にする。

ちび助は学校に忍び込んだという事になっており、もう少ししたら帰ると言って屋上に残った。きっとステルスシステムをつけて戻

つてくるだろうが。

三十分ほどしてちび助は戻ってきた。そんなに時間が掛かるとは思ってたなかった俺は、なんとなく悪い事をしたと思った。

人生最後となる学園生活が終わった。

まあ、何にもない最後だった。

「なあ、ちび助……最初に前は預言書の調整をしているって言ったよな」

最初にちび助がそう言っていたのを思い出した。

「それでさ、昨日の約束をなかった事に出来ないか？」

そうすれば……彼女は傷つかずにすむ。

『それは無理ですよ、もう時間は進んでしまってますから。予言とは先の事で、過去の事ではありません。こうしている間にも、預言書の内容は常に新しくなって、古い過去の出来事は消えてゆきます。過去の出来事は、その本人が体験し、今頃後悔感に苛まれたり、やつやって良かったと満足感を抱いている筈です』

それもそうか。彼女には悪い事をするな。これから先、この事を少なからずとも頭の隅に置いて生活しなきゃいけないんだから。

帰り道の途中、ちび助は報告があると、この世の何処かに存在するであろう、預言書を取り扱う神様の居場所に飛んで行った。

夕飯時になっても、寝る時間になってもちび助は帰ってこない。

「明日、明日死ぬんだな」

真つ暗な部屋で、嫌なぐらい目は冴えている。一番古い記憶から思い出して、あの頃は良かった、馬鹿だったな、なんて一人で思い出しては笑い、悶えている。

そういえば、ちび助とも明日でお別れか。今更だが、まあアイツが居て良かったと思える。一人なら今のうちに夜はずっと昔の事を思い出して頭がおかしくなってしまうそうだったな。

少し食費が高くついたが、一人で居る事を考えたら安いもんだ。時計が三時を指しても眠くならず、四時を指しても眠くならなか

った。

それからの記憶は覚えていない。

四日目 最後の前日。(後書き)

あと一話で完結になります。
もう少し、お付き合いいただきたいと思います。

五目 最終話

二月十三日。

「おい、ちび助生きてるぞ…俺」

左手を包帯とギブスで巻かれ、チェック模様の安っぽいパジャマを着せられ、独特の匂いを発するベットに横になっていた。

二月十二日。その日、俺は死ぬはずだった。

実際に事故にも遭い、意識をなくしたと思われる。

事故前後の記憶が全くなく、意識が戻ったときにはこの状況。

親が泣きながら俺に何かを言っていた。朦朧とした意識で特に何を言っていたかは覚えてないが。その後に刑事がやってきて、軽く事故の事を話してくれた。

雨が降り、よそ見していた乗用車が慌ててブレーキを踏み、雨の為タイヤがスリップして信号待ちで待っていた俺に突っ込んだと。先にガードレールに車体を削り、スピードが殺せた事で、俺も骨折程度で済んだ。

其処まで説明を受けていると、何となくだが記憶が戻ってくる…。

事故発生前。

「予報どおり雨だな」

朝から降り続く雨で、比較的水捌けの良いところであっても、大きな水溜りが存在する。

寝た時間が遅かった所為もあり、結構眠い。

『如月さん、気をつけてくださいね、今こうしてトラックが突っ込んでくるかも知れないのですから。もしかしたら、もしかしたらですけど、注意を払ってれば死ななくてすむかも知れませんか』

ちび助が気休めを言っていることは俺でも解った。俺は預言書をもつ見てないから結果はわからないが、きつと預言書の内容は書き

換わっていないだろう。

薄っすらと記憶にある内容の条件と一致する。

「ま、今までアリガトなチーナクル・メイリ・ビスケ」

ちび助は俺が本名を口にした事で表情を変える。

「い、今更それを言うんですか？ 一瞬何を言っているか解らなかつたじゃないですか」

完全にちび助本人も自分の名前を忘れるぐらい、ちび助という愛称に慣れていたようだ。

「つて、如月さん、前ッ！」

ちび助の声で咄嗟にいわれた方向を向くと、白い乗用車がゆつくりと俺に迫って来ているのがわかった。

ああ、これが……。

走馬灯の一つも浮かばないまま、俺の身体は全く反応する事が出来ず、スローモーションで迫る乗用車を眺めていた。

ガードレールに車体を削りながら、大きなブレーキ音と金属音を立てながら迫ってくる。

「ッ！？」

動かし方を忘れていた俺の身体が大きく右に動き始める。

俺が動いているわけではない。誰かに押されて動いた。

ゆつくりと動いてゆく視線で、両手を前に突き出したちび助の姿が見えた。

「あ、そういえば……」

完全に事故の前を思い出した。

車がぶつかる前にちび助が俺を突き飛ばしたんだ……。

そのおかげで俺は今こうして骨折だけで済んだんだ。ちょっと待て、あの位置に居たちび助が事故後俺の前に姿を見せないって事は！

まさか、俺の身代わりに……？

「ちび助のバツ力野郎……」

右手で額を押さえる。

「何がですか？」

「だから、何で元から死ぬって解ってる俺を助けて、し……って？」
其処に居るのが当然とばかりに、ちび助はパイプ椅子に腰掛けていた。

「痛そうですねーそれ、触っていいですか？」

左手のギブスを眺めながら手を伸ばすちび助。

「いや、触んなよいや、というか何がなにやら、説明をしろ」
訳がわからない。

まず俺は昨日死ぬはずだった。それが今こうして生きている。俺の身代わりになったちび助も生きている。もうわからない事だらけだ。

「えーっとまずですね…本来昨日如月さんは死ぬ予定でしたが、色々な事が重なり、骨折だけで済みました。まず、預言書と違う事は、トラックが乗用車に変わっていた事です」

そうだ。トラックが突っ込む予定が何で変わった？

「氣候の激しい変化で、ガソリンスタンドの従業員が風邪をひいて大事を取って休んじゃったんですよー。詳しい理由は解りませんが、そのトラックが給油しにガソリンスタンドに入ったんですけど、従業員の不足によって給油が少し遅れちゃったんですよ」

それで、トラックが俺の居る時間にその交差点に来れなかった訳だな。で、変わりに乗用車が……か。聞いてみれば、その交差点は魔の交差点じゃないか。車が変わっても事故になるなんて。

「それから調べたんですけど、乗用車の運転手は雨で視界が悪く、その為に運転操作ミスを引き起こしてしまいました。そして事故前に私が如月さん押しちゃって、打撲で済むところを骨折にしちゃいました。十一日に手書きで記録した予言と、事件後の予言を見比べたらそうなっていましたので……」

今サラッとすごい事言わなかったか？ まあ、命あるだけでもうけもんだよな。

「で、それで気まずくて今まで姿を消していたのか？」

『いいえ、上司に怒られてましたー。おおそ一日……』

よくちび助を見れば怒られてやつれているようにも思える。

まあ、予言を調整する奴が予言を大きく変えちゃ不味いよな……。

「なんか、色々とスマン」

『いえー謝る事じゃないですよ。そのおかげで、私たちのあり方も少し変わってきてますし』

と、言う事は何か、今回のちび助の行動で、人知らない所でちび助たちのあり方も変わったのか。

『まあ、私はクビになりましたけど』

そんな重要な事をサラッというな、サラッと。

本当に悪い事をしたな……。

『そんな顔しないでくださいよ』

俺の表情を読み取って、ちび助がパイプ椅子に登る。

『確かに予言書調整者はクビになりましたけど、これから新しい試験職、未来に起きる、未知の事件を未然に防ぐ正義のヒーローになったんですから！』

ポーズを決めてちび助が宣言する。

その姿を見るに、そっちの仕事の方が良いと姿で語ってる。

「だが、この預言書はまだ使ったんだな」

ポーズを決めるためにベットのの上に放り投げた預言書を手に取る。
『それですね、まあ……如月さん。ものは相談なんですけど、その預言書でこれからの如月さんの人生を見せるとい条件で、如月さん宅を拠点にして良いですか？』

そつえば、クビになったって言っていたな。という事は本来住む場所までなくしてしまったのか。ちび助は。

ちび助に預言書を投げつけ、俺は笑う。

「さあ？ 俺の答えはどうだろうな？」

『答えはイエスですね』

自信満々に答えるちび助。

「その心は？」

『七日間の付き合いです』

と、ちび助は笑う。

「そう来たか。まあ、今まで通りなら何とかなるが、一つ条件があるな」

待つてましたと言わんばかりにちび助は腕を組み、ポーズを決める。

『あー、この先の人生、何が起こるか解ってちゃ面白くない、今回ので身に沁みて解った。俺の未来は見えなくても良いから、お前のその仕事、手伝わせる』

俺の声色を真似しているつもりなのか、全く似ていない声で俺が言おうと思っていた台詞を言う。

「なんで俺の言いたい事が解った？」

『預言書がありますから』

またちび助が笑う。

確かに先が解った方が良い事の方が多いこの世の中。でも、皆がそれをしちまつたら失敗のない完璧な世の中になってしまう。

そんな世の中は面白くないな。

さてさて、俺の取ったこの行動が間違いか、正解であるかは預言書のみ知るってか？

五日目 最終話 (後書き)

やっと完結です。

自分の未来を知った主人公。

というテーマで書いて見たのですが、失敗したなと思います。

良い勉強になりましたし、こんな私の次回作にご期待ください。

最後まで読了、お疲れ様でした。

そして有難うございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5087d/>

明日の青春謳歌！

2010年10月8日15時02分発行